

本科 2 期 9 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 東大 国語



【問題】(演習)

出典：『更級日記』／中央大学

現代語訳

徳の高い僧侶などでさえ、前世のことを夢に見るのは、とても難しいということなのに、(私は)とてもこのように、頼りなく行く末もおぼつかないような気持ちで、夢に見るには、清水寺の靈堂に(私が)座っていると、別当と思われる人がやってきて、「あなたは前世で、この御寺の僧侶であったのだ。仏師(「仏像製作などに携わる僧侶」として、仏(「仏像」)をととても多く作りもしあげた功德によって、以前の(「前世の」)素性(より)まさって(現世のあなたの家柄の)人として生まれたのだ。この御堂の東にいらっしやる一丈六尺の仏(「仏像」)は、あなたが造っていたものだ。(金)箔を貼りかけて(「途中で貼って」)(あなたは)亡くなってしまったのだよ」と(言う)。(それを聞いて私が)「まあ大変。それでは、あれ(「その仏像」)に(金)箔を貼りもうしあげましょう」と言ったところ、(その別当と思しき人が)「あなたが亡くなってしまったので、他の人が(金)箔を貼りもうしあげ、他の人が(仏像の)開眼供養もしてしまった」と(言う夢を)見てから、もし(私が)清水寺に心をこめて参詣しもうしあげたら、前世でその寺(「清水寺」)で仏をお祈りしたという(ことを)功德で、自然とよくも(「よいことも」)あっただろうに。(いまさら)言っても仕方がない(けれど)、(清水寺に)参詣することもなくて終わってしまった(「そのままになってしまった」)。

解答

問1 F

問2 し

問3 B

問4 B

問5 D

問6 (私の人生には)自然とよいこともあっただろうに。〔解答例〕

現代語訳

その(年の)五月の一日に、姉が、子供を産んで亡くなってしまった。他人のことでさえ、(人の死というものは)幼い時からたいそうしみじみと悲しいと思いつけてきたが、(この度は肉親の姉のことであるから)まして言いようもなく、しみじみと悲しいと思いつくまい。母などは皆、亡くなった(姉の)部屋にいたので、(私は姉の)形見として残された幼い子供達を左右に寝かせていたところ、破れた板葺きの屋根の隙間から、月(の光)が洩れてきて、子供の顔にあたっていているのが、たいそう不吉に思われるので、(その子の顔に)袖をかぶせて、もう一人(の子)も抱き寄せて、(あれこれ)思うとたいそう悲しい。

その期間(「当座の法事など」)が過ぎて、親戚のところから、「亡き人(「姉」)が『必ず探して送ってください』と言ったので、探したが、その時は、見つけられずじまいだったのに、(亡くなった)今になって、(ある)人が(見つけて)よこしてくれたのが、しみじみと悲しいこと(です)」と言って、「かばねたづぬる宮」という物語を送ってくれた。本当にしみじみと悲しいことよ。(その)返事に(私は次のように詠んだ)、

うづもれぬ……(この世に)埋もれずに(残って)いた「かばね(たづぬる宮)」(などという不吉な書物)を、(姉は)どうして探し求めたのでしょうか。昔の下で(姉本人の)身こそがかばねとなって(むなしく)埋もれてしまいました。

(姉の)乳母であった人が、「お嬢様が亡くなった」今となっては、どうして(このお屋敷に残ることができましようか)」などと(言って)、泣く泣く、もと住んでいた所(「実家」)に帰っていくので、(その乳母に私は次のように詠んだ)

「ふるさとに……実家にこのようにあなたは帰ってゆくのですね。(これも姉の死ゆえと思うと姉の死は)ああどのような悲しい別れだったのでしょうか」「ああ何という姉との悲しい死別であったのでしょうか」。

(あなたは)亡き姉の形見として、何とかして(この家に居残ってほしい)と思います」などと言いつつ(その)返事に、(乳母は次のように書いてきた)

慰さむる……干潟のない波打ち際で浜辺の千鳥が足跡を留めることができないように、(ご主人を亡くして)慰めるすべもない私

は、どうしてこの（思い出だけが残る）つらい家に留まることができのでしょうか、いやできません。

解答

問 1 ① 〓 自発 ② 〓 過去 ③ 〓 打消 ④ 〓 過去の原因推量

問 2 (a) 〓 C (b) 〓 D 問 3 D

問 4 F 問 5 乳母なりし人〔本文 9 行目〕

問 6 乳母なりし人〔本文 9 行目〕

解説

問 1 文法問題。助動詞の識別問題。接続からどのような助動詞であるかを確定し、次に文脈からふさわしい意味を判断する。

① 上にある「思ひ嘆か」は力行四段活用の動詞「思ひ嘆く」の未然形なので、傍線部は助動詞「る」の終止形。「る」には受身、尊敬、可能、自発の四つの意味があるが、「思ひ嘆く」のような心情を表す動詞に接続している時は、自発を表すことが多い。自発は、意識的ではなく、自然とそうになるという意味で、ここでは「自然と思ひ嘆く、思ひ嘆かずにはいられない」といった意味になる。

② 上にある「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形なので、②は助動詞「き」の連体形。「き」の意味は一つで、直接体験の過去を表す。親戚の人自身が「かつて見つけることができなかつた」というのである。

③ 上にある「うづもれ」はラ行下二段活用の動詞「うづもる」の未然形か連用形。未然形に接続する「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形であり、連用形に接続する「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形である。そこで、③の下をみると、体言「かばね」が続いている。体言に接続するのは連体形であるから、傍線部は連体形であり、したがって打消を表す。「かばね」はここでは「かばねたづぬる宮」という物語を指し、「世間に埋もれることがなく、見つけることのできた物語」という意味に

なる。

- ④ 上にある「たづね」はナ行下二段活用の助動詞「たづぬ」の未然形か連用形。傍線部は連用形に接続する助動詞「けむ」の連体形と考えられる。「けむ」には過去推量、過去の原因推量、過去の婉曲・伝聞という三つの意味がある。ここでは、「何に」という「どうして、なぜ」という意味の疑問語があり、「どうして探したのだろうか」と理由を推量しているので、過去の原因推量の意味を表している。

問2 解釈問題。まずは傍線部を正確に口語訳し、その上で状況や場面を考慮して最適な意味内容の選択肢を選ぶ。

(a) について。傍線部の「あはれ」は感動詞で「ああ」という感動の気持ちを表す。「いかなる」は形容動詞「いかなり」の連体形で、「どのような、どういう」という意味を表す。「別れ」は名詞で、現代語と同じ意味。「なり」は体言に接続しているので、断定の助動詞「なり」の連用形であり、「けむ」は過去推量の助動詞「けむ」の連体形。そこで、傍線部を直訳すると「ああ、どのような別れであったのだろうか」となる。次に、「別れ」の内容について考える。傍線部を含む歌は、作者が実家に帰っていく乳母に向けて詠んだもの。ただし、この「別れ」を乳母との別れと考えると、今現在別れるのであるから、過去推量「けむ」が用いられているのは不自然である。また、乳母は主人が亡くなったのでこの家を去ると言っているのだから、どのような別れと疑問が出てくるのも状況にそぐわない。そこで、過去における別れということで、この「別れ」は姉との死別を指すと考えられる。姉との別れは姉一人に留まることなく、乳母との別れまでも引き起こした。そうした姉の死別の意味に思い至り、改めてその死別の悲しみを味わっているのである。

選択肢AとDの「なのでしょか」、Bの「ことができましょう」はいずれも過去の時制ではなく、過去推量「けむ」が訳出されていない点で、まずは不適切。さらに、AとDは「あなたとの別れ」とあり、「別れ」を乳母との別れと解釈している点も不適切。またBの「たとえる」という意味を表す語は傍線部にはなく、そのように解釈をすることもできないので、やはりBも不適切である。

(b) について。傍線部の「なに」は疑問や反語を表す副詞で「どうして、なぜ」という意味であり、「か」も同じく疑問や反語を表す係助詞。「うき世」は「憂き世」と考えられ、「つらくはかないこの世」という意味。「跡もとどめ」は「足跡を留める」という意味から、「その場に残る」と解釈できる。「む」は推量の助動詞「む」の連体形。そこで、傍線部を直訳すると「どうしてつら

いこの世に留まることができようか」となり、自分のことを言っているのだから、「いや、できない」と反語で解釈するのが適切。この表現だけを見ると、もうこの世で生きていくことはできないと言っているようにも思えるが、傍線部を含む歌は、実家に帰らぬように引き留めた作者に向けての、乳母の返事である。そこで、「憂き世」は広くこの世を指すのではなく、乳母の主人にあたる姉との思い出だけが残るつらいこの家を指していると考えられる。そこで、傍線部の解釈は「どうしてつらいこの家にとどまることができようか、いやできない」となり、乳母はあくまでも実家に帰りたいという気持ちを表しているのである。選択肢AとBは「なにか」の解釈が不適切。「なにか」には「どうかして」という願望の意味はなく、また「あれこれ」という意味内容はここでは不適切。また、Cは先にも見たように「憂き世」を広く「この世」と考えて、もはや生きてはいけなさと解釈している点が不適切。

問3

古語の意味の問題。一つの単語がさまざまな意味を表す場合は、文脈を丁寧にとどめて、その場にふさわしい意味を判断する。

「ゆゆしく」は形容詞「ゆゆし」の連用形である。「ゆゆし」は神聖の意を表す「肅(ゆ)」を重ねて形容詞化したもので、「神聖で恐れ多い」という意味を表す。また、「不吉である、縁起が悪い」、「良い意味でも悪い意味でも程度がはなはだしい」といった意味がある。傍線部は、寝ている子供の顔に月の光が当たっているのを見た作者の気持ちである。子供の寝顔が青白い月の光を浴びて、まるで死人の顔のように見えたのであろう。折しも、子供の母親が亡くなったばかりであるから、作者は不吉だと思ったのである。そこで、傍線部の「ゆゆしく」は「不吉に」という意味である。

選択肢を順にみていく。

Aは、立派な大社、すなわち出雲大社を人々が参拝して、信仰心を起こしたのであるから、傍線部は良い意味で「非常に深い」と信仰心を説明している。「ゆゆしく」は程度がはなはだしい意味を表している。

Bは、世の中が大殿の思いのままであるという状態についての説明である。「大殿」のことを作者がどのように思っているかでさまざまな解釈が成り立つが、一般には「たいそうすばらしい」という良い意味にとれ、傍線部はやはり程度がはなはだしい意味を表している。

Cは、光頼卿が信頼の上座に着席なさった時の様子である。ここでも、二人が置かれている状況や二人の人間関係がこの短文からは読み取れないので、解釈が難しいが、一般には上座に座った堂々とした姿が「たいそう立派ですばらしい」という良い意味

にとれ、傍線部はやはり程度がはなはだしい意味を表している。

Dは、道中、雨が降るのではないか、雷が鳴るのではないかと思つた時の気持ちを表している。その後仏にも祈つてるところから、天候の悪さが「とても不吉で」悲しく思われたと解釈できる。そこで、傍線部は「不吉で」という意味を表し、したがってこれが正解となる。

問4

空欄補充問題。選択肢はすべて助動詞なので、接続が適切なものをまずは選び出す。次に、空欄にあてはまる活用形から、選択肢をしほり、最後に文脈から最適な意味を表すものを見つけ出す。

空欄の上にある「なり」は、ラ行四段活用の動詞「なる」の連用形。そこで、選択肢から連用形接続の助動詞を選ぶと、AとBを除いた残りすべてとなる。Bにある推量の助動詞「めり」と、その連体形であるAの「める」は終止形接続。ただし、ラ変型の語の場合は連体形接続となる。また、Cの「たり」と、その連体形であるDの「たる」は連用形に接続する場合は断定ではなく、完了の意の助動詞ということになる。

次に空欄にあてはまる活用形を考える。空欄の上には係助詞「こそ」があるので、係り結びの法則から、空欄には「こそ」の結びとなる已然形の語が入るはず。そこで、選択肢C～Hの中から已然形のものを選ぶと、Fの「けれ」一つしかない。「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形である。もつともこの歌の中では詠嘆を表している。したがって正解はFとなる。

なお、念のため、残りの選択肢をみておく。Eの「ける」は「けり」の連体形、Gの「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、Hの「けむ」は過去推量を表す。

問5

内容理解の問題。まずは古語単語の意味を正確に押さえた上で、文脈から、誰を指しているのかを読み取る。

「形見」とは、「死んだ人や別れた人の残したもの」、あるいは「過ぎ去つた昔を思い出すてがかりとなるもの」を意味する。ここでは「昔の形見」とあるが、「昔」とは作者の姉が元気に生きていた時を指す。そこで、「昔の形見」とは、亡くなった姉を思い出すてがかりとなる人物ということになる。この言葉は、作者の乳母に向けての手紙の中にある。作者は、乳母とも別れなければならなくなった姉との死別をあらためて悲しむ歌を記した後で、「昔の形見には、いかでとなむ思ふ」と言葉が続ける。「いかで」はここでは願望の意を表し、その後省略されている意味内容を補うと、「何とかして、この家にとどまってほしい」と解釈でき

る。作者が乳母を実家には返さず、この家に留まるよう説得しているのだから、亡くなった姉を思い出すてがかりになる人物とは、乳母のことである。姉は亡くなってしまったものの、姉の世話をしていた乳母がいれば、いつも姉を思い出すことができる。だから、いつまでもこの家についてほしいというのである。

したがって正解は、文中の語を使って、「乳母なりし人」となる。

問6 内容理解の問題。ここでは和歌の解釈が問われている。下の(注)に掛詞の説明があるので、それも参考にして、この歌の内容

を正確に読み取ることが必要である。

まずは「浜千鳥」を文字通り、「浜辺にいる千鳥」の意味でとらえて歌の解釈を試みる。「浜千鳥」に関係のあるものとして、「かた」は「干潟」の意味、「なぎさ」は「渚」と「無き」の両方の意味で考える。すると、この歌は「干潟もない波打ち際の浜千鳥は、どうして足跡をとどめることができるでしょうか、いやできません」となる。「なにか」はここでは反語を表している。

設問から「浜千鳥」は誰か、人をたとえたものなので、次に、この歌を人間に置き換えて解釈し直してみる。今度は、「かた」を方法の意味で、「なぎさ」を「無き」の意味で考えると、「慰める方法もないのでどうしてこのつらい家に留まっていられるでしょうか、いやできません」となる。とどまることができないうのが、浜千鳥と同じだというのである。そこで、慰める方法もないということから、主人にあたる姉の死を悲しんでいる乳母の姿を想像できる。そもそもこの歌は、乳母が詠んだもので、この家に残ってほしいという作者の言葉に対する返事である。乳母は悲しい自分の気持ちを慰めようもないので、思い出の残るこの家には留まれないと断った。乳母は自分自身を浜千鳥にたとえることで、留まれるはずのないことを訴えているのである。したがって、文中の語を使うと、正解は「乳母なりし人」となる。

出典：『蜻蛉日記』／東京大学 88年・改題

現代語訳

心穏やかに過ごす日、つまらないことを言い争った挙げ句に、私も夫も罵り合いになって、恨み言を言って（夫は）出て行くことになった。（夫は）端の方に歩いて出て行き、幼い息子を呼び出して、「私はもう来ないつもりだ」などと言いつ残して、出て行ってしまつとすぐに、（息子の道綱は部屋に）入ってきて、ひどく泣く。（私が）「これはどうしたの、どうしたの」と言うけれど、返事もしないので、もちろん、そのようであるのだろう（「きつと、夫につらいことを言われたのだろう」と、推察せずにはいられないけれど、（周囲の）人が聞くとしたらそれも不愉快でみっともないので、問い詰めるのはやめて、あれこれとなだめていると、（そのまま）五、六日ほど経ってしまったが、（夫からは）音沙汰ない。いつもと違うほど（長く夫の訪れがない状態）になってしまったので、「ああひどい、本気じゃないと私は思っていたのに、（私と夫とは）頼りない仲であるので、このまま終わってしまうこともあるだろうよ」と思うと、心細くてほんやりと物思いにふけっているうちに、（夫が）出て行った日に使った盥坏（「髪をすく際に用いる器」）の水が、そのままになっていた。水面に塵が溜まっている。これほどまで（長い間訪れがないのだなあ）と、驚きあきれて、

絶えぬるか……私と夫との仲はもう絶えてしまったのか。せめて姿だけでも（水に映って）いるならば（それを頼りに）尋ねることができるとしようが、形見の水には水草が生え（影も映らなくなつ）てしまったよ

などと思っていた丁度その日、夫が姿を現した。いつものように（うやむやなまま）、終わってしまった。このように胸のつぶれるような時ばかりあるが、全く心の休まることのないのが、つらかった。

問1 藤原道綱

問2 オ

問3 (2) きつと、道綱が泣いているのは兼家にもうこの家には来ないつもりだなどと言われたからだろう
(3) 五六日ほど経ったが、兼家からは何の連絡もない。

問4 エ

問5 夫との縁が本当に切れてしまったのだろうかと不安に思う気持ち。〔30字・解答例〕

現代語訳

そういうながらも、母親が生きているうちは（ともかくも）暮らしていたが、（その母も）長わずらいの末に、秋の初めの頃に亡くなってしまった。まったくどうしようもなくやりきれない気持ちには、世の中の普通の人の比ではない。大勢いる（親族の）中で、私は（母に）死に遅れまい死に遅れまいと取り乱していたがその通りになり、どういうわけなのか、足や手などがただもうすっかり縮みあがり、息も絶えるようになる。そうしながらも、（いろいろと）ものを相談すべき人（「夫である兼家」は京にいたので、（都から遠い）山寺でこのような事態に遭ったので、幼い子どもを（そばに）引き寄せて、やっと言ったことは、「私ははかなくて（このまま）死ぬようです。あちら（「夫兼家」）に申しあげたいことは、『私の身の上のことは、決して決してお構いなさるな。この後のこと（「母の法事」）を、世の人々がなさる以上に、お用いなされよ』とお伝え申せ」と言って、「どうしようもない」とだけ言って、口もきけなくなってしまった。長い年月をわすらってこのようになってしまった人（「死んだ母」）のことは、今はもうどうしようもないものと考えて、私に周囲の人はすがって、前より余計に「どうしようもない、どうしてこんなことに」と、泣いた上にまた泣き乱れる人が多いい。（私は）口はきけないけれど意識はあつて、目は（なんとか）見えるほどだが、痛々しく思うだろう人（「父倫寧」）がそばへ来て、「親は（母親）ひとりであろうか（いやそうではない）。どうしてこのように（うちひしがれて）いるのか」と言って、煎じ薬を無理に（口に）入れるので、それを飲んだりしているうち、身体も次第に回復していく。

解答

問1 ア 11 イ 22 ウ 55

問2 a 11な b 22そ c 33禁止

問3 母の法事〔4字・解答例〕／母の葬儀〔4字・別解例〕

問4 今はもうどうしようもないものと考えて

問5 3

解説

問1 指示内容説明の設問。古典の指示語は「こ」「そ」「か」など単独でも用いられることに注意したい。また、この場合は「誰を」と聞いているので明確だが、たとえば「これ」が人間以外のものを指すとは限らないという、用法の違いにも留意したい。作品が『蜻蛉日記』という日記文学であり、自己の体験や思いを「回想録」的に記すものであるということも考える必要がある。

アの「これ」は、直後の「おくれおくれじと／惑はるる」の「おくる」という動詞の判断が決め手になる。人の生き死に際して用いると「(相手に)死に遅れる、生き残る、先立たれる」という意味を示す。最初に「生母に死別したおりの悲嘆」と示されていることから「作者」である。

イの「かしこ」は「彼処」と書く、離れたものを指す指示語で「あちら」の意味。今でも「そこかしこ」「あちこち」などと用いる。この場合は直後の《謙讓語》「聞こゆ」から、母子にとっての敬意の対象である夫(藤原)兼家が該当する。

ウの「かくなりぬる人」は「このように／なってしまうた／人」と直訳されること、直後に「いふかひなきもの」とあることから、「亡き母」以外には当てはまらないであろう。

問2 文法説明の設問。「な+連用形+そ」は、「……してくれるな」にあたる柔らかな《禁止》を表わす。「な」は終助詞「そ」と呼ぶ応ずる副詞である。なお、「連体形+なかれ」「終止形+べからず(まじ)」の順により強い《禁止》を表わすので合わせて覚えておく。

問3 指示内容説明の設問。「この御のち」と、尊敬の接頭語「御」がつけてあることと、後に「……とぶらひ」とあることから、亡

くなつた母親の葬儀や法事のことを婉曲に指示していると分る。古文では人の「死」などはズバリ言うことは少なく、たいいていは婉曲表現で表わすので注意が必要である。

問4 口語訳の設問。「AをBになす」の形で「AをBと見なす、考える」といった意味となる。「いふかひなし」は「言ふ甲斐無し」で、もともと「言つても仕方がない」という意味から、いくつかの意味で用いられる重要な慣用句。「いふかひなくなる」で「死ぬ」の婉曲表現であるが、この場合は「どうしようもない」の意味でよい。

問5 空欄補充の設問。本文全体が母親の死を悲嘆する場面であること、また(注)にしたがつて「父親」が「薬湯」を与えながら述べる言葉であることから「親」を選ぶことは容易であろう。

出典：『栄華物語』／立教大学 社会学部 93年

現代語訳

あつという間に新年になった。(陰暦) 一月に庚申の日があつたので、東三条の(娘の)院の女御の所でも、梅壺の女御の所でも、若い女房たちが、「年のはじめの庚申です。庚申待ちをなさってください」と申し上げるので、「それでは(庚申待ちをしましょう)とおっしゃって、どちらの女御方もみな(庚申待ちを)なさる。男君達(道隆・道兼・道長)は、この女御方の御兄弟で、三人いらつしやる。「たいそう面白いことである。たいそう趣深い。こちらの女御あちらの女御と参上するうちに、夜もきつと明けるだろう」など(男君達は)おっしゃって、さまざま(面白い)こと(「遊び」)をして、ご覧に入れなさるが、歌や何やかやと、風流豊かな女御方の様子をはじめ、女房達は、碁・双六の争いもたいそう面白くて、「この男君達もしいらつしやらなかったら、今宵の眠気覚ましは(うまくいか)なかったろうに」など言い思い申し上げて(いるうちに)、たびたび鶏も鳴いた。院の女御は、夜明け前に脇息に寄りかかっていらつしやるまま、そのまま寝込んでしまわれた。「今さらどうしてお休みになるのか」などと女房たちが申し上げるけれど、「鶏も鳴いたので、今はどうでもよい、起こし申し上げないでください」など(別の)女房たちが申し上げるが、ちよつとした歌を申し上げなさろうとして、この男君達が、「もしもし、ちよつとお尋ねしたい(ことがありますが、起きてください)。今さらどうしてお休みになるのか。起きなさるのがよい(「目をおさましく下さい)」と申し上げるのに、(院の女御は)まったくお返事もなく、目をおさましにならないので、(男君達は院の女御に)近寄って、「もしもし」と申し上げなされると、(院の女御は)普通と違って見えなさっているので、(男君達が院の女御を)引き起こし申し上げなされると、(院の女御が)そのまま冷たくおなりになっているので、驚いて、灯火を取り寄せて見申し上げなされると、(院の女御は)お亡くなりになっているのであるよ。

(男君達は)「ああ、驚きあきれたことよ」とも言いきれないほどに(つらく)お思いにならずにはいられず、(父の)兼家に先ず、

「これこれこういうこと」「Ⅱ院の女御がお亡くなりになったこと」がございました」と申し上げなされると、(兼家は)まったくわけがわからなくおなりになって、うろたえなさって、(院の女御を)見申し上げなされると、(お亡くなりになっているので)とても驚きあきれ、(院の女御を)抱えてただ転がりまわって途方に暮れなされる。屋敷の中は、大騒ぎになっている。

解答

問1 (a) 4 (b) 5 (c) 2

問2 5

問3 2

問4 (口) そのまま (二) まったく

問5 どうしてお休みになるのか。〔13字・解答例〕

問6 院の女御が脇息に寄りかかったまま死んでいたこと。〔24字・解答例〕

問7 今はどうでもよい、起こし申し上げないでください／今はそのままでもよい、起こし申し上げないでほしい〔解答例〕

特別問題

まったくわけがわからなくおなりになって、うろたえなさって、院の女御を見申し上げなされる〔解答例〕

(おわかりにならないで)

現代語訳

殿(「道長」)がお出かけになるので、どれくらい大勢の人々が競うようにして(比叡山に)お登りになったことか。(道長公は)さつそくご到着になって、(顕信殿に)お会い申し上げなざると、普通の僧たちは、額のあたり(の剃り際)の区別がはっきりしないけれども、顕信殿はそのようなこともなく、しみじみと可愛らしく尊い様子をしていらつしやる。(道長公はそれでも)やはりお見上げ申していらつしやる、お涙を抑えあそばすことがおできになれない。大勢の殿方も、たいそうしみじみと胸うたれる思いでお見上げ申しあそばす。殿の御前(「道長」)は、「それにしてもどんな気持ちで決心したことなのか。どんなことがつらかったのか。私(「道長」)を薄情だと思うことでもあったのか。官位(の低いこと)が気がかりであったのか。(それとも)またどうにかして(手に入れない)と思いをかけていた女の(思い通りにならない)ことでもあったのか。ほかのことはともかく、(この私、道長が)生きている限りは、どんなことを見捨てておくようなことがあるか(、いやそんなことはすまい)と思っているのに、(お前が出家するとは)情けないことよ。こうして母のことも私のことも考えずに、こんな(出家のような)こと(を)するなんて」と、(道長公は)おつしやり続けてお泣きになるので、(顕信殿も)たいそう心を動かされるようなお気持ちになって、ご自身もお泣きになって、「全く何事を(不満に)思いましようか(、何事も不満ではありません)。ただ、幼うございましたところから、何とかして(出家したい)と思っておりましたので、(父上が)そのような(出家の)ことには思いもおかけにならないことを、これこれ(「出家したい)と申し上げるようなことも、まことに恥ずかしく思っておりましたうちに、(父上が)そのような(出家の)ことには思いもおかけにならないことを、これこれ(「出家したい)と申し上げるようなことも、まことに恥ずかしく思っておりましたうちに、(父上が)私を)こう(した地位に)までお引立てくださいましたので、自分の本心からではなく(「気が進まぬまま)(あれこれ人づきあいをしながら宮仕えをして)過(ご)してきたのでございます。(ご両親をはじめとして)どなたに対しても、かえってこうして(出家して)こそが、お仕え申し上げる心の持ちようというものでもございましょう。(ですから決して悲しんでいただきたくはございません)」と(顕信殿は道長公に)申し上げなざる。そういうわけで(道長公は顕信殿が)そのままこの寺でお暮らしになるにあたっての当然のお心構えや、しかる

べき指図などをおおせつけになる。(顕信殿のご姉妹である) 皇太后彰子や中宮妍子様方からの御使者など(があつて)、総じてひどくあわただしい。殿の御前(「道長」は泣く泣く下山あそばされた。(道長公は顕信殿に) 御装束を用意してさし上げ、(また他の) 様々のものもさし上げあそばされる。

解答

問 1 1 〓 (道長公は顕信殿のもとに) さっそくご到着になつて

2 〓 用意してさし上げ

問 2 a 〓 ①

b 〓 ④

c 〓 ③

問 3 ア 〓 ②

イ 〓 ②

ウ 〓 ①

問 4 ②

問 5 ①

問 6 ④

解説

問 1 1 品詞分解すると、「いつしか・おはしまし・着き・て」となる。注意が必要なのは、前の二つすなわち「いつしか」と「おはしまし」である。まず「いつしか」だが、受験生としては「いつしか」と出てくれば《願望》を表す言葉と呼応して「はやく〜たい」と訳す場合がすぐに思い浮かばなければならぬ。例えば、「いつしか花咲かなむ(「早く花が咲いてほしい」)である。しかし、この場合は《願望》の言葉がないので、「はやく〜」という訳にはならない。「いつのまにか・さっそく」と訳すもう一つの

場合である。

次の「おはしまし」は重要敬語の一つ。「あり・をり」ないし「行く・来」の尊敬語である（「おはす」よりも敬意が高い）。訳はどちらの場合も「いらつしやる」で「心通るのでそれほど神経質になる必要もないが、右に述べた二つの言葉の尊敬語であるという点は知っておきたい。ここは道長が比叡山に行くという文脈なので、「行く」の尊敬語と考える。ここは次の「着く」と合わせて、「^レ到着になる」くらいに訳すとよい。「て」は接続助詞である。

以上を合わせて解答とする。

2 これも品詞分解すると、「いそぎ・し・て・奉ら・せ」となる。「いそぎ」は動詞「いそぐ」の転成名詞で「準備・用意」の意。類義語である「まうく（設く）」と一緒に覚えておこう。ここは、次のサ変動詞「す」の連用形である「し」と合わせて、「準備する・用意する」と訳す。次の「奉ら」は「与ふ」の謙讓語。「さし上げる」と訳す。この「奉る」は受験古文における類出敬語。用法をしっかりと確認しておくこと。

問2

基本単語の確認。一つでも不安なものがあれば、古語辞典などで確認しておくべきである。いずれも基本的なものである。

a 「うつくし」は現代語と異なる古今異義語の代表。「美しい」ではなく「かわいらしい」というのが基本的な意味である。類義語の「らうたし」との違いにも注意しながら整理しておこう。

b 「そこらの」「ここの」は「多くの」という意味である。「多くの」と聞いて受験生がすぐに思い浮かべるのは「あまたの」だろうが、これらも古文では頻出である。知らなかった諸君は、まとめて覚えておくとうい。

c 「つらし」は「冷淡だ・薄情だ」の意味。類義語「うし」がどちらかと言えば、「自分が原因で辛い」というニュアンスを帯びるのに対して、この「つらし」は「相手が原因で辛い」という響きがこもる。それゆえ、相手を非難するようなニュアンスが「つらし」にはある。ちなみに、平安朝の作品では、女性が「うし」という言葉を使うことが多い。典型的なのは、男に捨てられた女性（ないし男に大切にされていない女性）が「私ってなんて不幸な女なのかしら」という気持ちから使う「うし」である。相手の男を恨むのではなく自分の運命（古文では「宿世」という）を見つめるといふ発想は、現代ではわかりにくいかもしれないが、古文では当たり前前の発想である。単なる語句の暗記に終始することなく、（基本的な単語に関しては）なるべくこのような背景と結び付けて覚えるようにしておきたい。

問3

まずこれらの傍線部が、顕信の道長に対する言葉の中にあるという点をおさえよう。その上で、敬語表現に注意して解いていくというのが、この問題の解き方である。

ア 注意したいのは次の「給へ」である。諸君の中には、「あつ『給ふ』があるから尊敬語だ。自分の動作に尊敬語を用いるなんてことは(天皇以外)ないから、この主体は『私||顕信』ではなく『あなた||道長』だ」と考えた人がいたと思うが、こう考えては相手の思うツボである。よく注意してほしいのだが、この「給へ」は次に「む」が続いている。とすれば、この「給へ」は《未然形》である。尊敬語の「給ふ」は四段活用をするから、未然形が「給へ」になることは絶対でない。つまり、この「給ふ」は尊敬語ではないのである。ではこの「給ふ」は何か。ここでピンときたいのが、下二段活用の「給ふ」である。この下二段活用の「給ふ」はめったに出てこないが、出てくれば必ず問われる頻出敬語である。それゆえ、各自十分に復習しておいてほしいのだが、この「給へ」は下二段で活用しているので《尊敬語》ではなく《謙讓語》(《丁寧語》と呼ぶ人もいて呼称は一定しないが、《尊敬語》ではない方の用法である)と判断する。この点に気がつけば、この用法には必ず「主語が一人称になる」という特徴があるので、その主体も一人称である「私||顕信」となる。

イ 「はべり」という《丁寧語》は使われているが《尊敬語》はない。この点に気がつけば、この「思ふ」が相手の動作でないことは明らか。三人称の可能性もないではないが、「ただ幼くはべりし折より」からの繋がりを考えれば、ここは一人称ではないという意味が通じない。したがって、この主体も「私||顕信」である。

ウ 「思しめし」という敬語表現に注意する。「思ふ」の尊敬語は「思す(おぼす)」だが(ぼーっとしていると訳し忘れてしまうので意識して覚えておこう。「思す」は尊敬語である)、それよりもさらに敬意の高いのがこの「思しめす」である。したがって、この主体は「私||顕信」にはならない。これまでは反対で、ここは「あなた||道長」となる。

問4

傍線部の直前がヒント。顕信は、幼少の頃から出家したいという思いを抱いていたが、それは道長が思いもかけなかったと言っている(「ただ幼く思しめしかけぬことを」。ここを手がかりにすれば、顕信が出家したいとなかなか言い出せなかったのは、出家は道長の思いもかけなかったことつまり道長の考えに背くことだったからということになる。道長としては、顕信に自分の跡を継いで政治家としての道を行んでほしかったのである。したがって、答えは②。

問5 まず、「給ひにしかば」「はべりしなり」とあるように、この傍線部（を含む一文）が過去の事柄を表していることを押さえようとすれば、この時点で現在のことを述べている③と④は不適切ということになる。後は①と②を比較すればよいのだが、②「負担」に相当する語句が傍線部の中にあること、また「ありく」を「出家する」とは解釈できないことなどから、①を選んで正解とする。

「世にあらむ限りは、何ごとをか見捨ててはあらむと思ふ」と言っていることから推測できるように、道長は顕信のためにあれこれと世話をしてきたのである。しかし、そうだからこそ顕信は出家したいという自分の願望を言い出すことができず、道長の期待に応えるべく不本意ながらも宮仕えをしてきたというのである。

問6 右に述べたとおり、顕信が出家したのは「幼い時から出家したいと思っていたから」である。「両親の束縛から逃れたかったから」「官職の昇進が思い通りにならなかったから」「思っていた女と結婚できなかつたから」というのは、道長が推測した出家理由であるにすぎない。そして、それらに対しては、顕信が「さらに何ごとをか思う給へむ（＝何かが不満だったから出家したのではない）ありません」と言っているように、出家の理由とはなっていないのである。続けて「ただ幼くはべりし折より、いかでと思ひはべりし」と言っている点が、真の出家理由である。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--